



岸本周平  
Kishimoto Shuhei  
中央大学客員教授

<http://www.shuhei-k.jp>

<http://blog.goo.ne.jp/shu0712>

# 教育の現場

落選中の候補者といえども、やはり社会に貢献しなければいけません。清掃ボランティアなども積極的にやっていますが、本人の気持ちは別にして、どこか選挙目当てのにおいがします。そこで、最近は地元の小学校で出前授業をしています。

きっかけは、和歌山大学教育学部の附属小学校の先生から、5年生に「経済」についてわかりやすく教えてもらえないかという依頼でした。教室に行きましたら、休憩時間なので、元気な子供たちが騒いでいました。「あっ！ 岸本周平や！」「民主党の岸本さんや」と何人かの子供たちが言います。

市内でも戸別訪問すると知名度のない私ですが、附属小学校の5年生の間では、けっこう知られているのに驚きました。「和歌山駅で演説してるおっちゃんやろ！」と言う子もいました。バスで通学しているので、いつも見ているそうです。

経済学の基本は「人間の欲望をコントロールし、すべての人の幸福の合計を最大にすること」だけであることを説明しました。そして、まずは隣の席の人と物々交換のゲームをみんなでしました。その次に架空の貨幣を作って、グループ内で買い物ゲームをしました。複数の人が集まって交換をする場所を「市場（いちば）」といいます。市場の便利さをゲームで知ってもらいました。「市場（しじょう）」という難しいのですが、要するに、過去の経済史上、最大の発明は市場と貨幣だということを理解してもらえたと思います。

これに味をしめて、以来、小学校に行くのが楽しみになりました。私の母校、広瀬小学校でも最近授業をしてきました。私のころは1学年4クラス180人でしたが、今は6年生で2クラス41人しかいません。そして、その内17人が中高一貫の私立（一部県立）の中学校に進むそうです。そうすると、私が子供のころには全員が当然のこととして進学した地域の「城東中学」に行く子供たちは、何となくやる気を失うようです。

6年生を担当している先生が、たまたま私の中学校の同級生でもあり、「城東中学からでも、頑張って東京大学に行った先輩がいるというのを教えてやりたいんだ」と頼られました。子供たちはみんなまじめで素直な良い子たちに見えましたが、中学受験に失敗したり、そもそも受験をしなかった子供たちは、複雑な心境で中学校に進むのです。12歳で、そのような気持ちを持つのはいささか早過ぎるのではないのでしょうか。

一口に、格差の問題といっても、教育の現場では、「格差の固定」が始まっています。保護者が教育熱心であったり、塾に通わせる経済的ゆとりがある家庭とそうでない家庭で、12歳から格差が生じ始めるのです。



小学校の先生方とお話をする機会が増えたので、このような問題に加え、公立学校の問題点が見えてきました。荒れる学級を持たされて、一生懸命取り組む先生ほど燃え尽き症候群になったり、健康を壊すそうです。学校側だけの問題ではないのですが、公立教育の復活がいかに重要か、肌身で感じるようになった今日このごろです。

